

TS（トータル・サティスファクション）を目指して②⑥

人を「育てる」こと、「変える」こと

校長室担当

人を「育てる」時に最も気を付けないといけないことは、自分が相手を「変える」ことではないということです。「育てること」と「変えること」は実は全く異なるものだと言えます。「自分以外の他人を変えることはできない」ということは既にお伝えしましたし、このことはどのような場面でも指摘され、すでに広く知れ渡っていることだと理解しています。その理由は、人を変えようとすることは、自分も苦しむことにつながるからです。

一人一人の個人は、育ってきた環境も異なり、考え方や価値観も多様です。いいところもあればそうでないところもあり、それに対する自分自身の受け止め方も人によって異なります。まずはこのことを理解しましょう。自分とすべて同じ感じ方・考え方をする人はいるようで実はいません。一人一人の姿や顔が異なるのと同じです。いいところは、本人も周囲の人もいいと感じていますからトラブルにはならないのですが、問題は誰にも必ず存在する「弱点」（に見える部分）の捉え方です。相手の「弱点」を改めさせようとすることも相手を変えようとする行動となりますが、その思いが強すぎて、押し付けてでも直させようとし、責めたりする行動をとると、気づかないうちに自分自身に負の変化が起こります。他人を責め始めると、必ず「自分も責められるのではないか。」という不安感が生まれることから、逆に自分の弱い部分を隠そうとします。そして、これが積み重なると自分の失敗を隠そうとする行動へとつながります。こうなると・・・。

この人を変えようとする感覚は多かれ少なかれ誰しも持っていますから、気を付ける必要があります。「そんなことは言ってない。」と言いながら、態度や姿勢で相手を操作しようとする人も多いですし、時には「みんなが言ってるよ。」という言葉在意図的に使い、まるで大多数がそう感じているという言い方で相手を変えようとする人もいます。そういう方法ではなく、「私はこう思うのですが、どうでしょう？」と穏やかに伝えましょう。この方法であれば、「押し付け」と感じさせる心理的な操作性は消えて、相手に考えてもらう機会を与えることができます。そこ

から相手が気づくかどうか、相手が変わろうとされるかどうかは、自分ではなく相手の課題となりますから、任せるしかありません。相手が変わらないもどかしさをもちつつ、「任せる」そして「待つ」ということはなかなか難しいかもしれませんが、学校現場に限らず、人を育てる上で大切な技術だと思います。

そしてもう一つ大切なことが、お互いが相手の弱点を嫌な部分だと捉えて矯正しようとするのではなくて、相手のこの部分で自分が補完的に役に立てるのではないかと考えることです。その方が自分も相手も楽になりますし、自分自身の人間的な成長にもつなげることができます。これこそが、いつもお話している、「少し損をする感覚」が試されるところです。世の中に完全な人間なんていないわけですから、自分がその部分を支えようという考え方がお互いにウィンウィンの関係で成長していく方法であり、人間関係で悩むことが少ない環境をつくるのだと思います。これを子どもたちに私たちが日々モデルとして伝えることが学校としての責務だと思います。いい学校をつくりましょう、一緒に。(令和 4 年 10 月 11 日)

本校教職員として目指す方向性（確認）

※令和 3 年 4 月 1 日にお願ひしたこと

- 1 トータル・サティスファクションの実現
- 2 学びに向かう力をもつモデルを率先垂範
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現
- 5 「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の考えを戒める

